



ぞんめい

5 存命の親・往還道へ

再度の神殿ふしん、戦時下の弾圧、そして復元への歩み……。激動の昭和、を歩んだ人々の姿をダイナミックに描く！

消されていく天理教の昭和史

—『教祖(おやさま)物語』第5巻から考える—
進められた「復元」と『おふでさき』公刊の意義

おやさま 教祖物語 全5巻



1 月日のやしろ

教祖中山みき様のご誕生から、「月日のやしろ」に定まれ、貧のどん底に向かわれる足取り(ひなた前半)を描く。



2 たすけづとめ

つとめ場所の建築、おつとめのお歌の製作、ちば定めと、おつとめ完成へ着々と歩を進められる教祖のお姿を描う。



3 扉ひらいて

きびしい弾圧の嵐の中も、いそいそと歩まれる教祖。世界にたすけの光を照らし、ついに明治20年「正月26日」を迎える。



4 存命の親・炎の群像

教祖は姿をかかされたが、存命同様にお勤めのお言葉に支えられ、人びとは教会本部を設置し、教勢倍加を実現する。

「稿本天理教教祖伝」などの公刊本にもとづいて、
教祖ひながたの道と天理教の歩みを再現。
親しみやすく品格のある絵。
平易で適切なことばづかい。
小学生から大人まで、
やさしく理解できる待望のシリーズ。



全5巻本として約30年前に発行され、1991年に愛蔵版として一冊にまとめられた『劇画教祖(おやさま)物語』は、現在は第1巻から第3巻までが一冊にまとめられ、第4巻のみ単独で販売され、第5巻は販売が中止されて道友社売店の書棚から消えた。

この本は1から3巻までが教祖伝で、第4巻が教祖が身を隠されてから大正末年までが描かれている。

第5巻はほぼ63年間の昭和の時代を社会の動きと関連させて天理教の歴史を描いたもので、ほぼ忠実に史実を追い、漫画とはいえ手軽に読める天理教史になっていた。

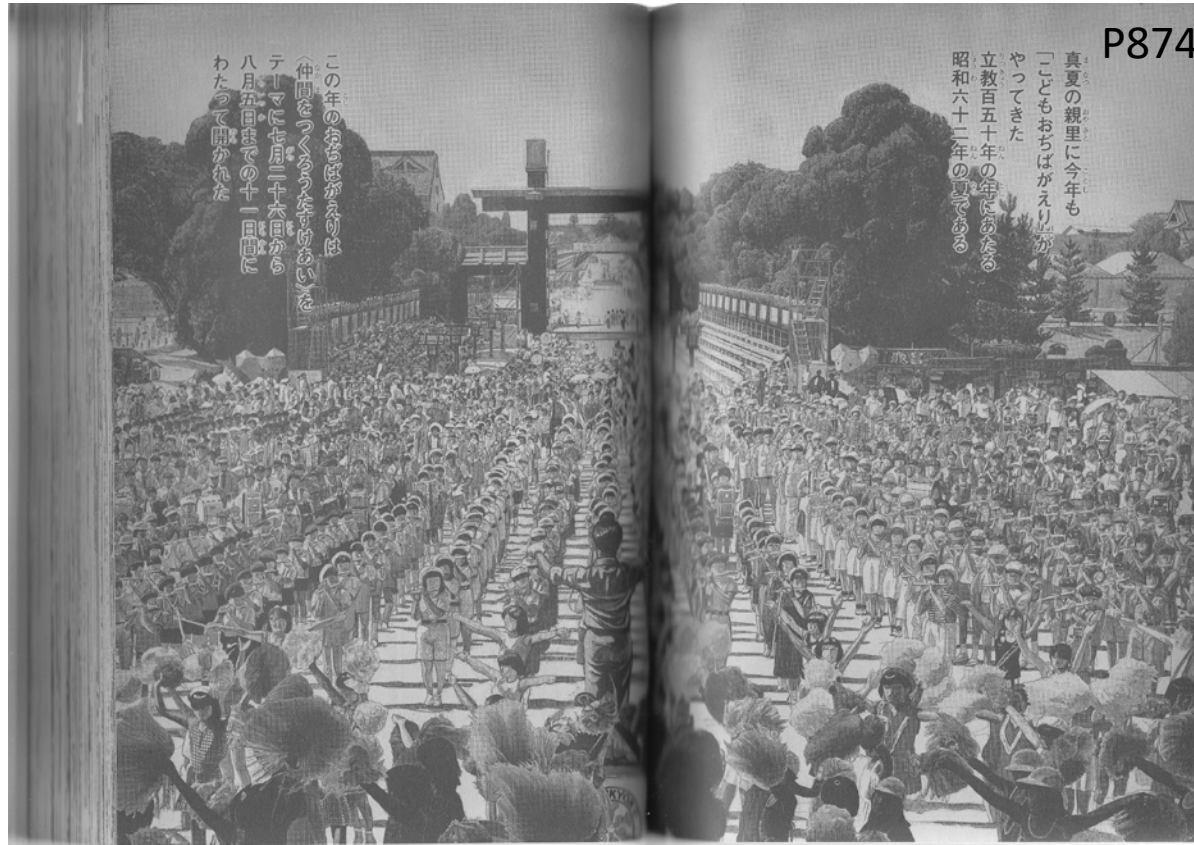
この分野の本は、教祖が身を隠されてから昭和21年までの歴史を記した『潮の如く一天理教教会略史』(全3巻.上村福太郎.1959)と青年会の動きに限定される『天理教青年会史』(全5巻.1970~2007.天理教青年会本部)、『天理教史参考年表改訂6版』(高野友治編.養徳社.1998)ぐらいしか見当たらないことを思うと大変残念なことである。

そこで今回はこの本の絵から天理教の昭和史をふり返ってみよう。

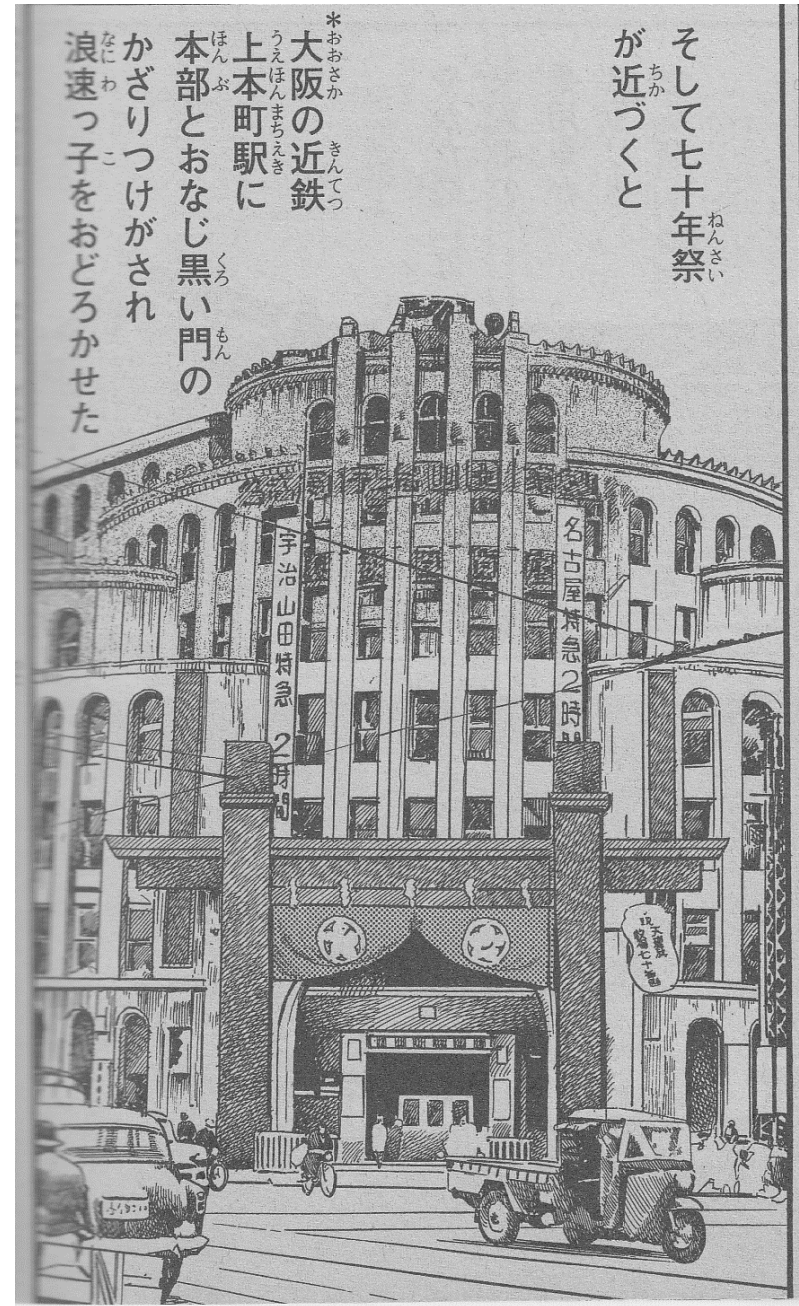
『劇画教祖物語』

原作 服部武四郎 作画 中城健雄 発行 天理教道友社

年祭に寄り来る人々



近鉄上本町駅に出来た黒門



第5巻の冒頭は立教150年祭の年の子供おぢば帰りで、黒門と神殿の間の神苑に集まった子供たちの鼓笛演奏の場面である。この巻で目立つのはこのような教周年祭などの行事で多くの人々が神殿に集まっている様子である。

中でも印象に残るのは、70年祭の時に大阪の近鉄上本町駅に出来た本部黒門のレプリカの絵である。まだ鉄道輸送が主だった時代にいかに多くの人々が近鉄電車を利用したかを彷彿とさせる。

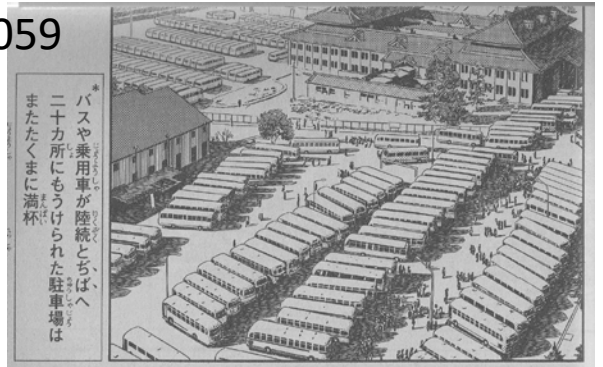
80年祭では、人々の移動手段が電車からバスなどによって変わったことが描かれ、90年祭では、『稿本教祖伝逸話編』の刊行や「ひもろぎ」などの廃止が記されている。また、百年祭では「しめ縄」「玉串」が廃止された。

「玉串」などの廃止は、天理教の教えを教祖の教えに戻していくという「復元」の動きの中で、教祖の教えは本来神道ではないとの考えから昭和45(1970)年4月30日に教派神道連合会を退会し、さらに具体的な形として神道の名残を無くしていくものである。

「復元」の為に神道色を排除

P1059

駐車場を埋め
尽くす団参バス



*バスや乗用車が陸続とちばへ
二十方所にもうけられた駐車場は
またたくまに満杯

P1075

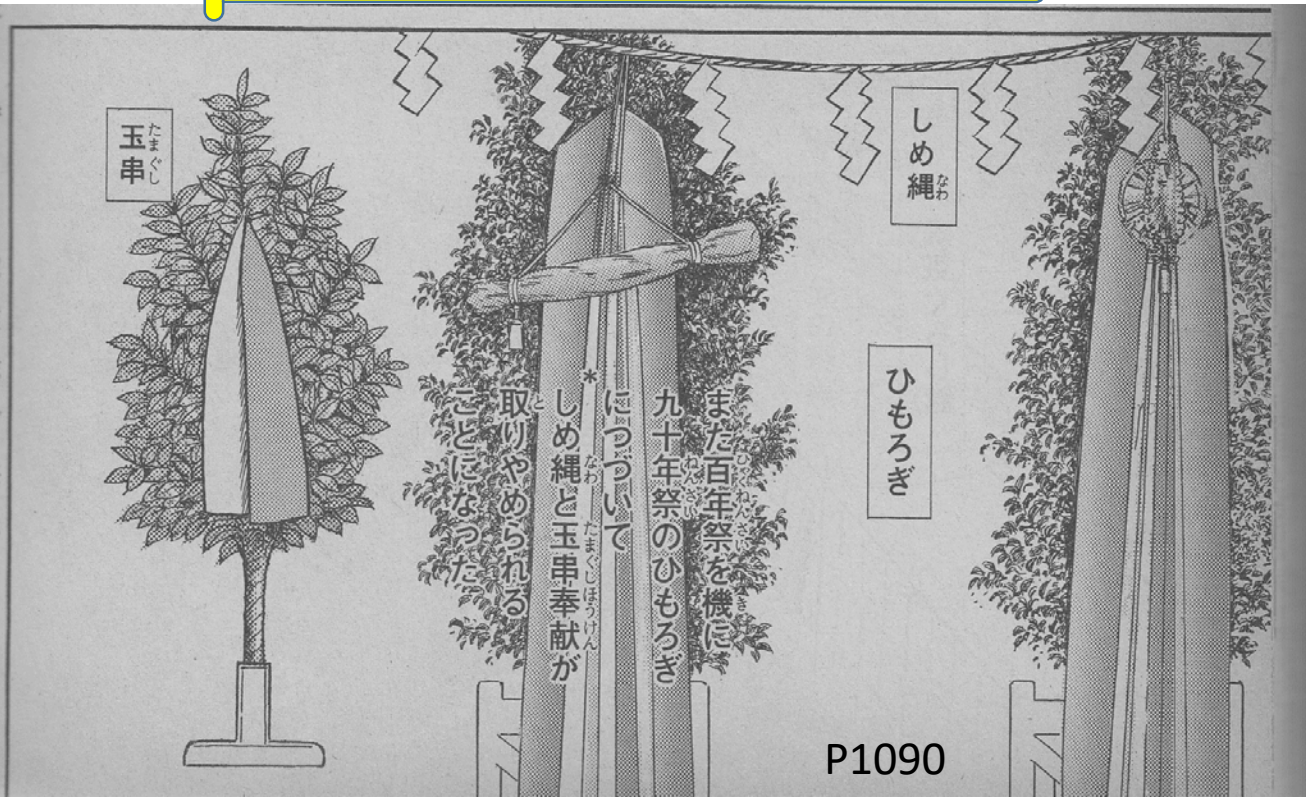


そんななか
教祖九十年祭は
昭和五十一年一月二十六日
から始まり期間中に
二百万人をこす人びとが
参拝した

年祭を期して
稿本天理教教祖伝
逸話編が刊行され
また祭典時に神前
のおかれた*ひもろぎ
が
廃止された

*ひもろぎ：榊に布などの飾り物をつけたもの
(千四十二ページ参照)。神道のなごり。廃止でまた一歩復元した。

P1090



玉串

しめ縄

ひもろぎ

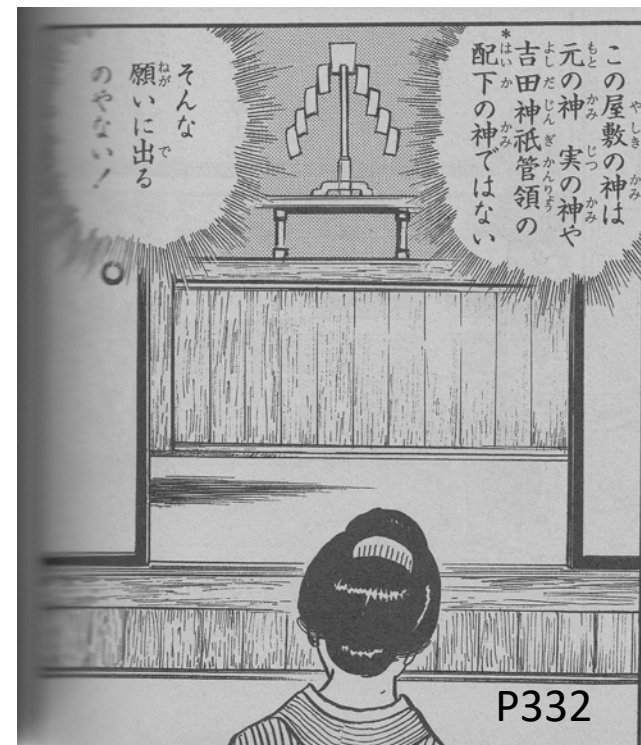
また百年祭を機に
九十年祭のひもろぎ
にとついで
しめ縄と玉串奉獻が
取りやめられる
ことになった

天理教の中に神道の祭式が持ち込まれたのは、慶応3年のことである。

文久年間(1861~64)頃から教祖のもとに寄ってくる人々が増えてくると、金銭なども集まるようになるとともに、客を取られる形になる修験者や祈禱師からの嫌がらせも増えた。そのため、教祖の息子であった秀司は吉田神祇管領の大和国総取締役であった守屋筑前の協力を得て、その認可を得た。その時の古市代官所へ提出した添書願の書類が残っている。そこに記載された12柱の神名が天理教の中に最初に入ってきた神道の神名であった。また、吉田神祇管領の祭式がこの時に入ってきた。『稿本教祖伝』にある(註一)(P100)が古市代官所への願い文書であるが、「神名」の部分は一中略としてあるので、ここには略されていないものを提示しておきます。

当時庄屋敷村は、藤堂藩に属し、大和国にある同藩の所領を管轄する役所は、古市代官所と言って奈良の南郊にあった。この古市代官所では、小泉不動院の訴えもあり、守屋筑前守の紹介もあり、その後も庄屋敷村の生神様の風評は次第に喧しくなってきたので、慶応二年の頃、呼び出して事情を聴いた。

お屋敷からの一行は、宿にあてられた会所に二、三日宿泊された。代官所では段々と実情を聴取したが、不都合の廉は少しもない。たゞ公許を受けて居ない点だけが、問題として残った。そこで、話合いの上、吉田神祇官領へ願い出る事となった。先ず、慶応三年六月、添書の願を古市代官所へ提出し、領主の添書を得て、秀司は、山沢良治郎を共に、守屋筑前守も同道して京都へ上り、吉田神祇官領に出願し、七日間かゝって、慶応三年七月二十三日付けで、その認可を得た。(註一) (『稿本教祖伝』P96)



教祖は、「吉田家も偉いようなれども、一の枝の如きものや。枯れる時もある。」と、仰せられた。(『稿本教祖伝』P98)

乍恐口上之覺

庄屋敷村

願人

善右衛門

私義

從來百姓渡世之ものに御座候然ルニ三十ヶ年餘り前、私幼少之頃、^{風毒}癩病ニ而足腦之候ニ付、亡父善兵衛存

命中、私方屋敷内ニ天輪王神鎮守仕信心仕、右天輪王神与申者

國常立尊	伊弉諾尊
國狹槌尊	伊弉册尊
豐斟淳尊	大日靈尊
大戸道尊	泥土煮尊
大戸邊尊	沙土煮尊
面足尊	册册
惶根尊	册册

『稿本教祖伝』に引用されているものは、枠の部分【中略】として削除されている。

右拾貳神ヲ合天輪王神と相唱候由、亡父善兵衛代々承傳居信心仕來り今ニ不絶信心仕居候義ニ御座候、

然ルニ右信心之儀諸方江相聞近來諸方々追々參詣人有之、就而ハ神道其筋ヲ故障被申立候而ハ迷惑難澁仕候ニ付、此度京都吉田殿江入門仕置度奉存候ニ付乍恐此段御願奉申上候、何卒御情懇を以吉田殿江之御添翰被爲下置候様奉願上候、右之趣御聞届被爲成下候ハ、難有仕合可奉存候 以上

慶應三卯年六月

庄屋敷村

願人 善兵衛

同村年寄 庄 作

同村 ” 平右衛門

同村庄屋 重 助

服部庄左衛門様

(天理教管長家古文書)

『復元』32号「史実校訂本」中二・461頁

昭和20(1945)年頃、天理には飛行場があった。



昭和20(1945)年頃の天理には、二つの航空隊があった。一つは三重海軍航空隊奈良分遣隊で、予科練(飛行予科練習生)の教育が目的で信者詰所を兵舎とし、多い時は1万人以上の生徒がいたという。

当時の軍は大きな宿泊施設のある所(高野山の宿坊なども)はどこも接收して兵舎としたので天理教が特に軍に協力したとかという話ではない。

もう一つは大和海軍航空隊で昭和20年2月に飛行場をもつ部隊として出来た。敗戦時にはゼロ戦など100機を超える飛行機が残存していた。絵にある防空壕はこの隊が通信所として使っていたものらしい。

天理の飛行場については、『幻の天理「御座所」と柳本飛行場—朝鮮強制連行・強制労働ガイドブック』(高野眞幸編.2003.解放出版社)にくわしい。

同書の最初にある「太平洋戦争下の天理」の部分(P9)を引用しておきます。

【陸軍、そして三重海軍航空隊奈良分遣隊】

太平洋戦争下の天理には、まず、1941年12月から43年10月ごろまで、天理教名東詰所に本部を置き奈良中部第67部隊(陸軍)に駐留する部隊500~600人くらいが3つの詰所に分宿する。これが日本軍の天理教関係施設を利用する最初である。

1943年12月1日には、“三重海軍航空隊奈良分遣隊”が、同じく天理教名東詰所に本部を置き、現在の天理市の中心市街地である丹波市町・三島町の天理教関係施設を利用して開隊。予科練(海軍飛行予科練習生の略称で、いわゆる海軍少年飛行兵)の教育を担当し、1945年3月1日には、三重海軍航空隊から独立して奈良海軍航空隊”となる。開隊時に入隊した予科練は“甲種予科練”の13期(甲13期生)の1万1601名で、天理教の信者詰所を利用し、25の兵舎に分かれて62分隊に編成された。もちろん当初は飛行機一機なく、航空隊らしい施設もほとんどない航空隊で、兵舎も畳敷きであった。

【大和海軍航空隊】

三重海軍航空隊奈良分遣隊とは別に、1945年2月11日には天理市街地の南の田園に柳本飛行場をもつ“大和海軍航空隊”（大和空）が開隊する。鳥取県の第2美保航空隊が解隊となり練習飛行隊が柳本飛行場に移転したのである。柳本飛行場の滑走路に飛行機が初めて着陸したのは1945年2月1日である。それも竹で菱形に編んだ“すのこ”を敷いて整備した滑走路であった。同年2月11日までに“赤とんぼ”（九三式中間練習機・複葉機）の6個中隊54機と予備機が第2美保航空隊から飛来したのである。

【基地増備と海軍設営隊・308飛行隊】

柳本飛行場の増備年月は、1945年6月であるが、それとほぼ一致する5月15日に第581海軍設営隊、6月15日に第588海軍設営隊が大和海軍航空隊に入る。

7月半ばには、茨城県の百里原基地から戦闘308飛行隊と千葉県の本更津から第752海軍航空隊の偵察飛行が入る。戦力は着々と増強され、敗戦時には兵員1700名、ゼロ戦49機、練習機71機、爆弾大小合わせて約1500発、等が大和海軍航空隊に配置されていたと防衛庁図書館資料の（GHQへの）「引渡目録」に記録されている。また、航空隊の周辺の山にはトンネルが数多く掘られている。そのトンネルを「御座所」や大本営にしようとしていたのである。

【朝鮮人労働者】

これらの日本軍施設を建設したのは日本人だけではない。柳本飛行場には朝鮮人が労働者として3000人入ってきたといわれている。強制連行され就労した人、日本各地で生活していて集められた人とその家族などである。そして特筆すべきは、強制連行された朝鮮人男性のための朝鮮人慰安婦が存在したことである。

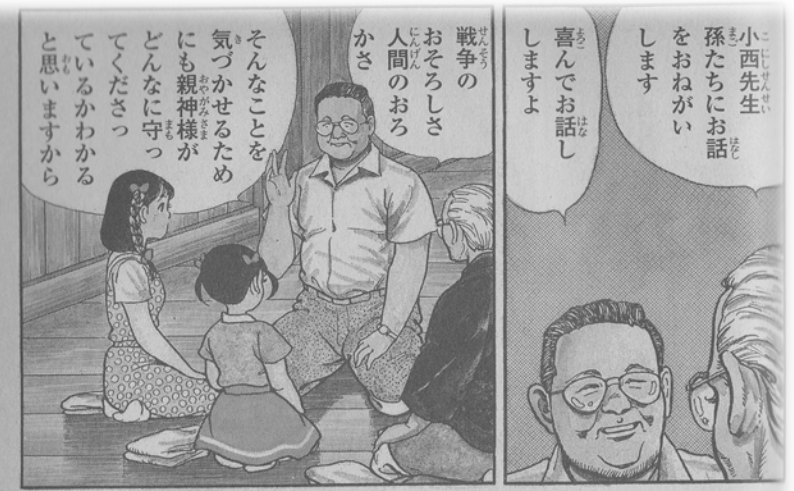
ではなぜ、敗戦直前の天理がこのような状況になったのか。本土決戦時に陸軍航空総軍戦闘指揮所を予定していたどんづる峯地下壕とともに、海軍(軍令部)は柳本飛行場とその周辺を本土決戦時の重要な拠点とする計画を立て、実行していたのである。

(太字は当資料作成者による)

特攻隊のパイロットは、不時着した時、胸ポケットにあった「教典」がそのショックを和らげ一命を取り留めた。

ここに出てくる「小西先生」とは、東日本にある某大教会の5代会長小西吉彦氏のことである。この劇画では沖縄本島に近づいたとき敵に発見され攻撃を受け島に不時着し、その際、操縦桿が胸に刺さるのを「教典」が防いでくれたことになっている。小西氏が特攻隊で出撃し、島に不時着して助かったという話は私も聞いたことがある。ただ、違うのは、不時着したのはエンジンの不調か何かで、胸に入っていたのは、『おふでさき』だったという点である。

この劇画にも書かれているが、『おふでさき』は昭和3年に初めて教会本部から公刊された。しかし、昭和13年から始まった「革新」の嵐の中で、翌14年に全教会の『おふでさき』は回収されていた。だから、昭和20年に『おふでさき』を胸に入れていたというのは辻褃が合わない話なのである。それゆえ、この劇画の原作者は「教典」に替えたのだろうか。

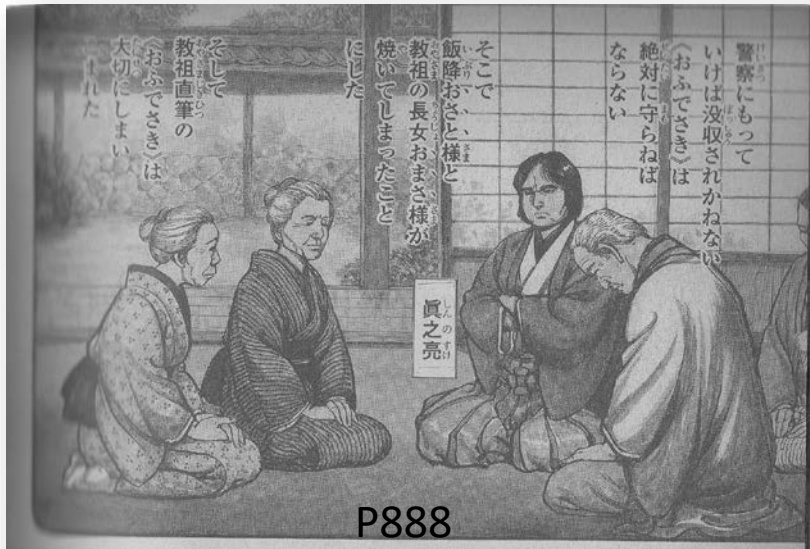


P983

P987

P989

明治16年以降焼いて無いことになっていた「おふでさき」が昭和3年に公刊された



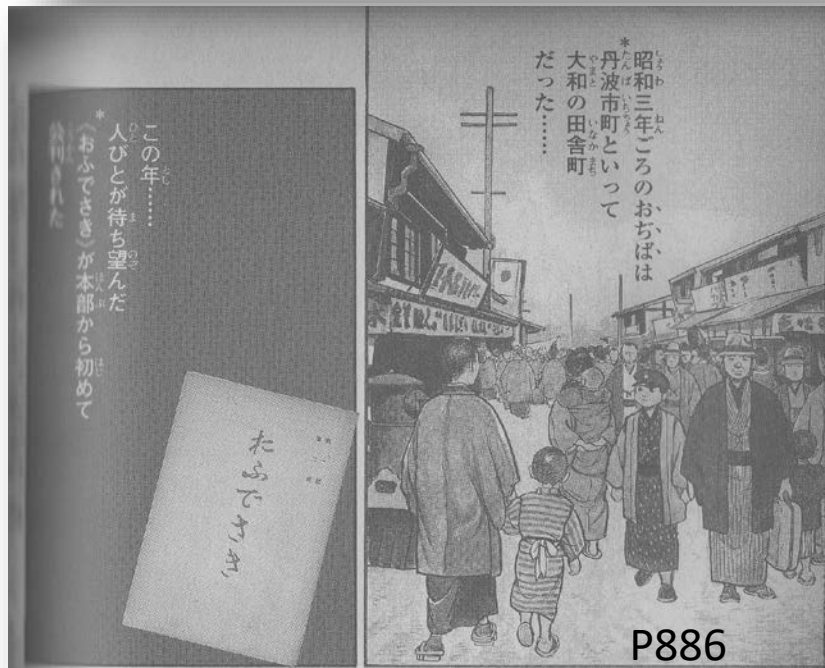
P888



P887

説明するまでもない事であるが、『おふでさき』は天理教祖中山みきが明治2年から15年までの間に書き残した1711首のお歌のことである。これは絵にもあるように明治16年にその存在を警察から咎められたため、焼いて無くなったことになっていた。それが、昭和3年に天理教教会本部から公刊されたのである。確かに画期的なことである。

しかしその後、「革新」によって『おふでさき』は回収された。



P886



〈革新の嵐〉の中で『おふでさき』は回収され処分された

【革新】

昭和11年(1936)に、教祖(おやさま)50年祭が盛大に執行された。引き続き明けて昭和12年10月に予定されていた立教百年祭の執行を目指して、全教が勇み立つ中、文部省は国家非常時体制の強化を期して、全宗教団体に対し、全面協力を要請してきた。各宗教団体かその対応の道を歩む中、昭和13年11月4日、文部省より中山正善2代真柱に招請があった。そのときに求められたのは、現下の諸情勢に即応できるような革新的な体制を整備し実行する、ということであった。天理教は特に問題視されており、監視が一層厳しくなっているから、猶予はできないとの指示であった。不本意ながら、当局の意を踏まえて協議した結果、次のような重要事項の改変を決断した。すなわち、教義儀式およびその他の行事は、すべて教典に依拠して行うこと。また、泥海古記、元初まりの話に関連する教理は、今後一切説かないことなどである。信仰的生命の浮沈に関わる事柄であったから、言語に絶した苦しい決断であった。(『天理教事典第3版』P206)

昭和12年、盧溝橋事件を発端として日中戦争がはじまると、国の宗教団体に対する監視が厳しくなった。天理教に対しても「革新的な体制を整備し実行する」ことが求められ、「教義儀式およびその他の行事は、すべて教典に依拠して行うこと」などが決められた。この「教典」が小西氏が胸に入れていたとされるものである。ではこの「教典」とはどのようなものであったのか。



明治教典は、いわば独立請願書に添附する書類として編纂されたもの

第一 敬神章

天地の悠久にして万物の生成化育息まざる所以のものは神明調摂の天理に依る宇宙の森羅万象皆其の靈徳の妙用に基かずと云ふことなし而して主宰の神あり分掌の神あり各々其の靈徳の妙用によって神名を表彰す概して是を天神地祇八百万神と云ふ蓋し造化の大原にして万有の根本なり誰か尊仰敬事せざらむや然れども八百万神悉く其の名を称へて崇拜せむことは人の能くせざる所なり故に靈徳の最も顕著なる十柱の神を挙げて奉祀す即ち

国常立尊／ 国狭槌尊／ 豊斟淳尊／ 大苦辺尊／ 面足尊／
惶根尊／ 伊弉諾尊／ 伊弉册尊／ 大日靈尊／ 月夜見尊
是なり之を総称して天理大神と云う（『潮の如く』上P68）

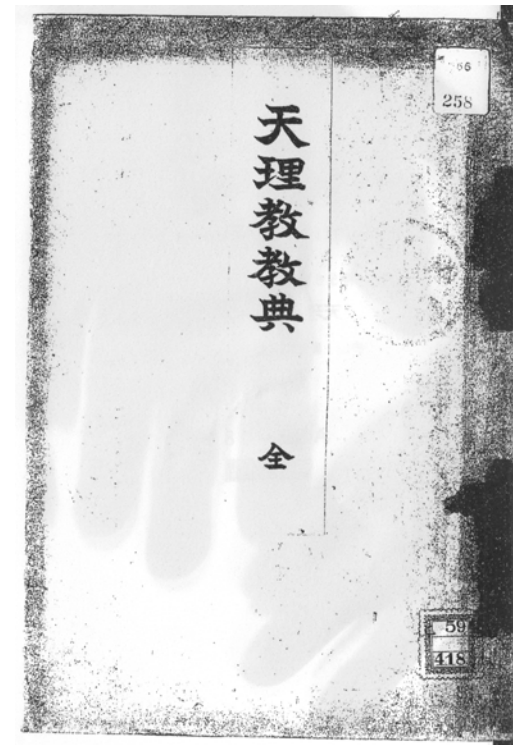
明治教典は、いわば独立請願書に添附する書類として編纂されたものであったが、当局は、只これを書類として留めることを許さなかった。茲に於て、愈々同教典を実行することとなり、本部に於ては、早速此の教典を教会及び信徒に頒布すると共に、神道天理教会教師講習会規程を制定、同三十六年八月十八日より九月五日迄、十九日間の長きに亘って、先ず第一回教師講習会を開催、以て教典の普及に専心することとはなった。

—中略—

先の本部に於ける第一回教典講習に引き続き、高安分教会におつては、既に同明治三十六年九月十四日より同二十七日に亘り、部内教師を高安に招集、率先第一回講習会を開催、教典の普及に努力して居るのである。（『潮の如く—天理教教会略史』上.P67）

このとき、受講者の一人であった東本初代会長中川よしは、東本へ帰ると、「教理の勉強はするな。おたすけは教祖のお話でやれ」と宣言して終生変わらなかったのです。

教祖の教えた真の教理を理解し、身につけて、たとえ本部が説いても、似而非教理に振り回されるなという厳しい仕込みでありました。（『ほんあづま』No176.P26.八島英雄）



「教典」とは通称「明治教典」といわれるもので、教祖を慕って入信した信仰者にとっては学ぶべき教えなどではなかった。

また、70頁ほどの冊子で操縦桿が胸に刺さるのを防げるようなものでもなかった。

「おふでさき」は信仰者の間で書き写されていった

(初代)真柱様が亡くなられたときに初めて教会の門をくぐりまして、すぐ年が明けて大正四年、教会に行ったときに初めてそこでおふでさきを読まされたという入信なのです。

いろいろな出来事について、当時の一信仰者の歩みとして八島松四郎(『ほんあづま』誌の著者八島英雄氏の父)氏の状況をお伝えしたほうがわかりやすいのじゃないかと思う上から申し上げるのですが、そのときのものは、皆書き写したおふでさきですから、松四郎氏の第一印象というのが「何だ、このきたない字で、仮名ばかりで書いてあって、文法も間違いだらけの字を、さもありがたそうに見せる、教会の先生で、自分の姉が世話になっているというから、さぞ偉い先生なんだろうと思っていたら、学問のない人というのは恐ろしいものだ」ということだったというのです。

それでも、あんた見込みがあるからこれを読めと言って初日から皆と別のところで外には知れないように一人だけにおふでさきを読ませてくれたという形だったのです。

— 中略 —

松四郎氏は、お話を聞きに行くというよりも、おふでさきをそのまま読み、次の日はまたその次を読み、そして書き写すという状況で、入信の初めからそれをやったのですが、当時のものを書き写すのですから、誤りの字もある。そうすると、まぎらわしいのはカッコして二つ書いてあるのです。

そういうおふでさきを書き写して勉強いたしました頃の大正五年という時期に、あるところでおふでさきが出版されたのです。

これは本部ではございません。東大教会系の人たちが出版したものであろうというふうに鑑定されているのですが、これは実は私のところのお年寄りの役員さんが下谷に住んでいる頃、そちらから手に入れたものをずっと長く持っていたという、天理教宝典編纂会という実に見事なもので、これが大正五年五月一日印刷ということになっております。

(『ほんあづま』No119P3.1979)

明治16年に鴻田忠三郎が『おふでさき』を書き写していたときに、警察に咎められたとあった。とすれば、他の信仰者にもその存在は知られていたであろう。あるいは、すでに書き写されたものがあつたかもしれない。

大正4年に入信した人がまず『おふでさき』を読まされて、その後それを自分で書き写したという話が残っている。さらにそこには大正5年(教祖30年祭)には、天理教宝典編纂会というところから『おふでさき』が印刷されたとある。

当時の信仰者は『おふでさき』を書き写し、また、新しい人にそれを書き写させていたのだ。

昭和3年公刊本発刊以前に印刷された『おふでさき』

大正5年に出たという天理教宝典編纂会のもの以外に何冊かの『おふでさき』が出版されている。

「天理教同志会版」大正14年発行

3号131,132の部分
同志会版は「手入れ」、安江本は「ていり」

大正十四年一月二十日印刷
大正十四年一月廿三日發行

御筆先譯文
奥附

奈良縣丹波市町字布留
發行者 天理教同志會
代表者 田邊要藏

大阪市西區北堀江御池通一丁目九番地
印刷者 岡本省三

不許複製

一列は皆々吾が身氣を注げよ。神が何ん時何處へ往くやら一寸話し神の心の急き込みは。用木寄せる模様許りを段々と多く立木もあるけれど。何れが用木なるや知れまい用木も一寸のことで無程に。多く用木が欲しいことから日々に用木にては手入する。何處が悪しきと更に思ふなじ木も段々手入するもあり。其儘こかす木もあるなり如何なるの自由用自在の此試めし。外なるとこで更にせんぞや今迄も試めしと云ふて説いたれど。最う此度は試しおさめや段々と何事にも此世は。神の體や思案して見よ

天地は神の肉體なり

三五

おなじ木も だん／＼ていりするもあり
いかなるの ちうよじざいのこのためし
いまでも ためしこいふてこいたれど
もふこのたびはためしおさめや

だん／＼こ おふくたち木もあるけれど
よふぼくも 一寸のことではないほどに
にち／＼に よふぼくにてはていりする
おなじ木も だん／＼ていりするもあり
いかなるの ちうよじざいのこのためし
いまでも ためしこいふてこいたれど
もふこのたびはためしおさめや

317
683

大正十四年十一月十日第一版
昭和二年一月二十日第二版
昭和三年四月二十日第三版

奈良縣丹波市町三島
編輯者 安江
發行者 天祐
代表者 安江明社

神戸市布引町二丁目二十三番屋敷
印刷人 淺野好三郎
神戸市布引町二丁目二十三番屋敷
印刷所 白馬堂印刷所

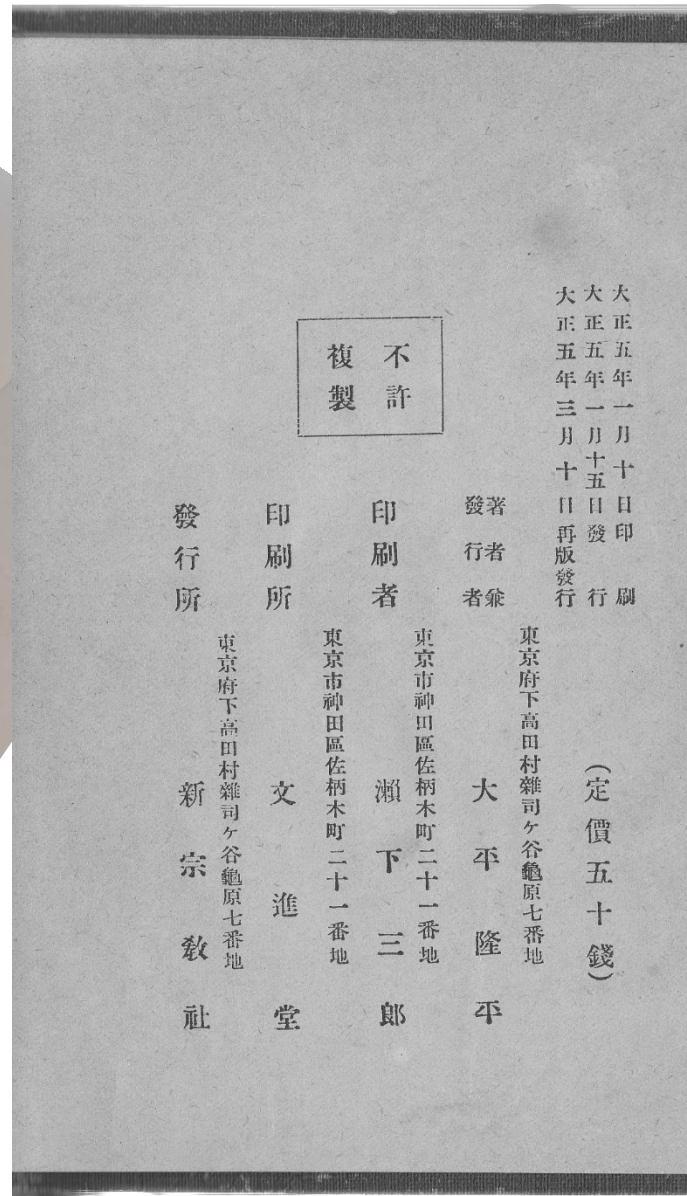
明

通称「安江本」大正14年発行

大正5年にポケット版の『おふでさき』が出版されていた



横11×縦15×幅2cm
ハードカバー



複製 不許

大正五年一月十日印刷
大正五年一月十五日發行
大正五年三月十日再版發行

(定價五十錢)

著者兼 發行者 大平隆平
東京府下高田村雜司ヶ谷龜原七番地

印刷者 瀨下三郎
東京市神田區佐柄木町二十一番地

印刷所 文進堂
東京府下高田村雜司ヶ谷龜原七番地

發行所 新宗教社

その中に大正5年一月発行の『評註御筆先』がある。

これは大正4年4月から5年8月まで天理教祖の教えをテーマにした雑誌『新宗教』を発行した大平良平(隆平)氏の手になるものであった。『新宗教』は「教祖の伝記逸話を蒐集しなければ悔を千載の後に残す」、またこの事業は天理教徒一団のものではなく「実に全人類の事業」であると宣言して創められたもので、自立採算が取れるほどの部数が出た(『己れに薄く、他に厚く』P265山本素石.1993.立風書房)という。

同じ大平氏による『評註御筆先』も3月には再版されており、かなりの部数が出たと思われる。

小西氏の話に戻せば、「教典」が胸に入っていた可能性は「信仰」の問題から考えてもほとんどありえず、『おふでさき』とすれば、胸に入る程度の大きさの本は回収の対象にならず存在していたということと言えるだろう。

公刊「おふでさき」と比較した『評註御筆先』の問題点

132 131
だん／＼とおふくたちきもあるけれどそれがよふぼくなるやしれまい
よふぼくもちよとのことではないほどにおふくよふきがほしいことか
ら
にち／＼によふぼくにてはていれするどがあしきとさらにおもふな
おなじきもだん／＼ていれするもありそのま／＼こかすきもあるなり
いかなるのちうよぢざいのこのためしほかなるどでさらにせんぞや
いま／＼でもためしといふてといたれどもふこのたびはためしおさめや
だん／＼となにごとにてもこのよふはかみのからだやしやんしてみよ
このたびはかみがおもてへでゝるからよろづのことをみなをしへるで
めん／＼のみのうちよりのかりものをしらすにいてはなにもわからん

御筆先 三號
四三

『評註御筆先』第3号131.132

にち／＼によふぼくにてわていりする 百三十一
どがあしきとさらにをもうな 百三十四
をなじきもたん／＼ていりするもあり 百三十二
そのま／＼こかすきもあるなり 百三十三

第三号 百二十九—百三十二
七十一

公刊本『おふでさき』第3号131.132

公刊本が昭和3年に出版される以前にすでに『おふでさき』は教会本部以外から出版されていたのだから、公刊本の出版意義は何だったのだろうか。

左に第3号131と132のお歌をそれぞれ並べてある。公刊本は「ていり」であり、『評註・・・』は「ていれ」である。公刊本は教祖直筆本の写真版をベースにしているのに対して『評註・・・』は何度も書き写されたものをベースにしているからどちらが教祖のものかは疑う余地がない。

ところが、現在も3号131等の「ていり」の解釈は「ていり＝手入れ」なのである。

3号131,132の部分【当資料の13頁に掲出】
同志会版は「手入れ」、安江本は「ていり」

『評註・・・』は「ていり」の8例中、6例が「ていれ」

『用語別おふでさき集』天理教青年会本部出版部.2001.P339

それよりもひねた木からたん／＼と
ていりひきつけあとのもよふを 七 19

このさきハあゝちこゝちにみにさハリ
月日^{ていり}を^するとをもゑよ 八 81

とのよふな事もやまいとをもうなよ
なにかよろづ八月日ていりや 十 68

にち／＼にみのうちさハリついたなら
これ八月日^{ていり}なるかよ 十 71

みのうちにとのよな事をしたとても
やまいでわな^い月日^{ていり}や 十四 21

しかときけ心ちがゑばせひがない
そこでだん／＼ていりするのや 十五 70

でいり
でいり

このきいもたん／＼月日^{ていり}して
つくりあけたらくにのはしらや 七 17

『おふでさき』3号131,132を除く他の全用例
「^{ていり}」で困んだところ以外は、『評註・・・』は「ていれ」

7号17に「でいり」がある。「でいれ」という言葉はふつう使わないから、ここはくでいり(出入り)であろう。とすれば、「ていり」もく出入りの濁点`が落ちたものと考え事が出来る。

このきいもたん／＼月日^{ていり}して
つくりあけたらくにのはしらや 十七

それからハにち／＼月日みさだめて
あとのよふ朮のもよふばかりを 十八

それよりもひねた木からたん／＼と
^{ていり}ひきつけあとのもよふを 十九

にち／＼に月日をもわくふかくある
をなじとところに二ほん三ぼん 二十

第七号 十七ー二十 百七十九

公刊本『おふでさき』第7号17.19

「このきいもたん／＼つきひ^{ていり}してつくりあげたらしくにのはしらや
それからはにち／＼つきひみさだめてあとのよふきのもよふばかりを
それよりもひねたきいからだん／＼と^{ていれ}ひきつけあとのもよふを

ひねた木からだん／＼とは心の曲つた人間からだん／＼と云ふ意味である。

御筆先 七號

一〇五

手打った事あるく	手入れは柱と成るもの	手入れの理	手入れという理	手入れと言う	手入れ	手入れ	手入れ	手合わせ
三四	三六	二六	二六	三六	三六	三三	二二	三四
五	六	七	七	六	六	〃	一	五
四〇〇	四六一	五七四	五七四	四五六	四六一	四六六	二五三	四〇七
一	9	4	1	13	9	9	9	3

3号131の解釈例－他書も「ていり＝手入れ」という意味で主旨は同じである。

よふぼくというのは用に使う木でありますから、これは手入れをしなければ使えない。そのまま放ったらかしでは、使いものにならない。だから、日々「ていり」手入れをする。枝打ちのためにナタをふるったり、鋸をあてたりする。これはちょっと痛いということにもなる。そうした場合、どこが悪いのかななどと決して思ってはならない。よふぼくとして使うための「ていり」なのだ。（『おふでさき通解』P109.上田嘉太郎.2017.道友社）

『おさしづ索引』（天理教教義及び史料集成部.1985）「手入れ」は「おさしづ」に用例があるが、その全体の量から考えるとごく少ない。

「お手入れ」という言葉は教内ではよく使われてきた用語である。病気や事情などで困れば、「神のお手入れだ」というようなかたちで困っている者を責めて、上位者の思いに従わせようとする暗黙の意思を感じる。

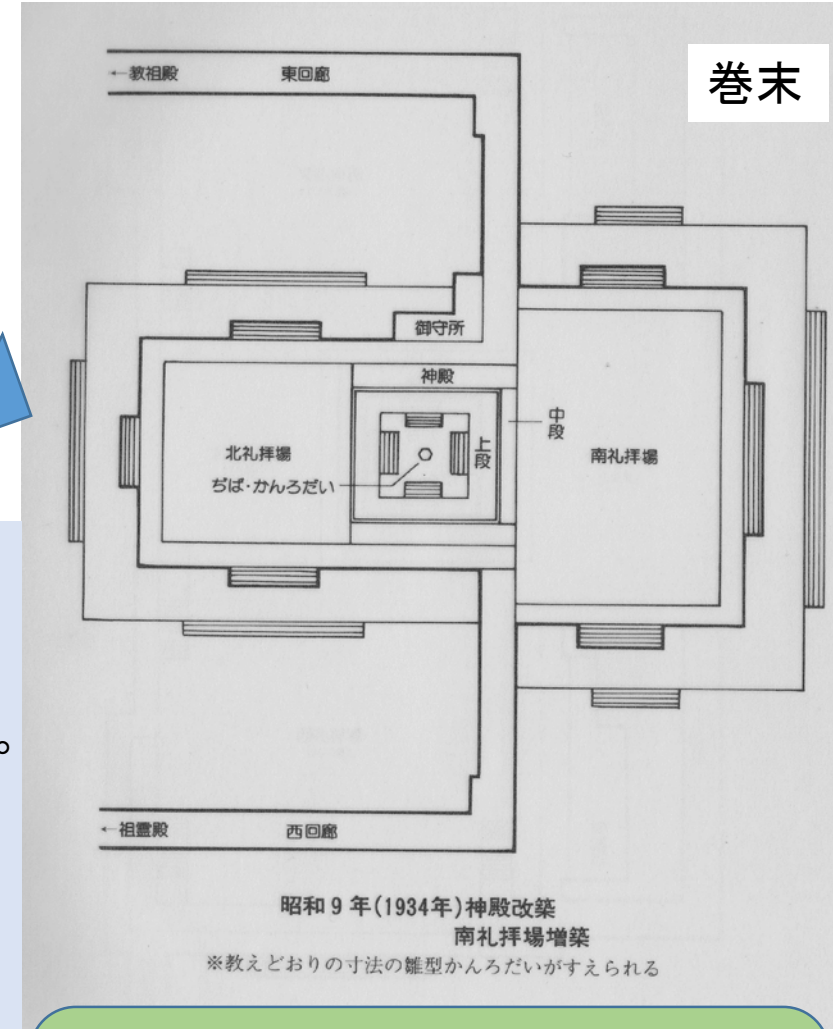
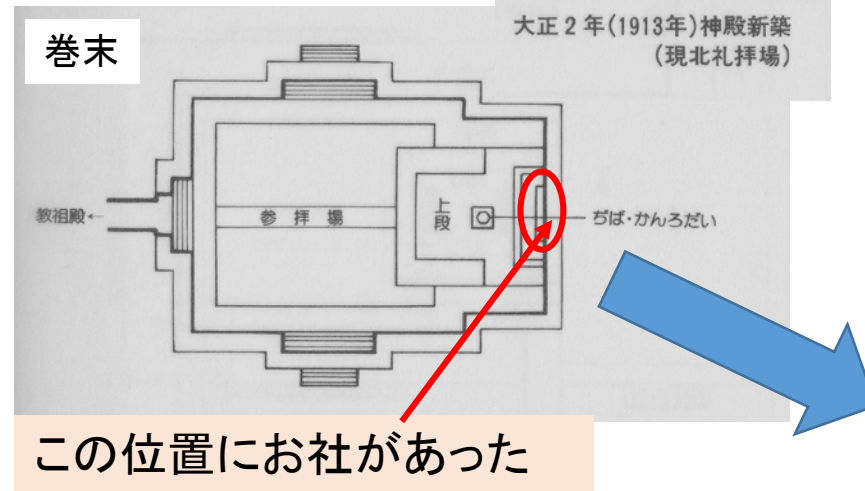
『おふでさき』には「入り込む」という用例がある。入れば当然出る時が来るわけで、それが「出入り」という表現になったのではないかと私は考える。

従来の教説に従うのではなく、『おふでさき』の一字一句から教祖の教えに迫ることこそが公刊本発刊の意義であろう。

【おていれ】 手入れに接頭語「お」がつけ加えられた語。一般には「庭木の手入れをする」と言うように、物事の状態を良く保つ、あるいはより良いものにしていこうとする意味に使われる。それに準じて、親神が人間救済の思わくを実現していく上で、人間に働きかけられ、それによって現れてきた出来事を人間にとって「おていれ」と言う。特に病気になった場合には、自らの心得違いに親神から「おていれをいただいた」というように使われる。（『天理教事典第三版』P132.2018）

【月日手入れ（神罰ではない）】 月日の理に従って生きる。それに外れて、人を困らせたり、痛めたりすると、良心が自分を責める。月日の心に外れた自分を責めるのです。これを「月日手入れ」というのです。／ 自分の良心が自分の間違った心を責めるのが、お手入れであります。／ 私の外にいる神様が、お前はけしからんぞ、悪い事をしたから悪い病気を与えると裁くのは、今までの拝み祈祷の支配者の神の考えです。／ 教祖の教えは、自分が真理を悟ったら、自分が真理の社です。自分の良心が自分の間違いを責めるのです。（『ほんあづま』No419.P9.2004）

昭和9年、神殿の改修により神床にあった社が撤去され、木製13段のかんろだいが設置された



神殿改修により、白い幕で覆われていた部分にある日突然「つとめの庭」が出現した状況を当時の天理中学生が伝えている。

北礼拝殿の時は、神殿には天皇の先祖の神々の社があり、神殿の床に切り込みの穴が開いておりまして、その下の地面に二段だけのかんろだいがありまして、それは拝殿からは見えないのです。信者からは見えない形で据えられていたのです。そして北礼拝殿の真ん中に廊下がありまして、男子席、女子席を分けていたのです。

その頃、天理中学の生徒であった人の言葉は、非常に劇的なのです。天理中学の生徒は毎日参拝に行くのですけれども、ある時に、白い幕が正面に張られたというのです。

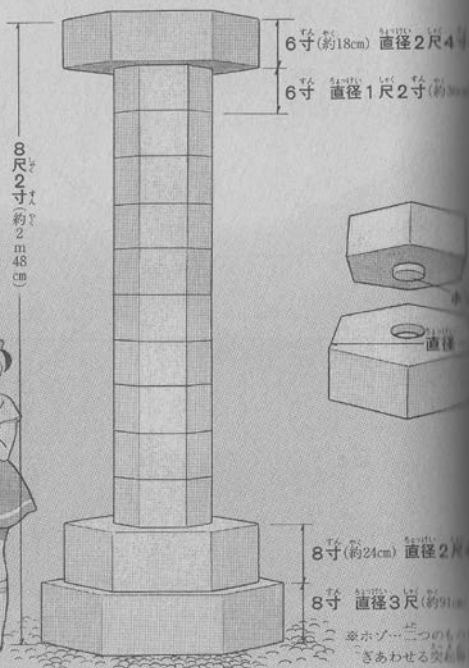
その幕を通して神様に参拝して学校に行っていたのですけれども、その向こうで大きな普請が行われていたというのです。そしてある時、その幕が取り払われますと、天皇宗の先祖の神々のお社がなくなっていたというのです。そこに「かんろだいを囲んだつとめの庭が出現し、そして、その先に南礼拝殿があった」というのです。こういう非常に劇的な表現で、白い幕を外した時の驚きを伝えているのです。(『ほんあづま』No482.P3.2009)

教祖が教えられた神の目標(めどう)《かんろだい》と儀式《神楽づとめ》の図

かんろだいは「雨打たし」と「おさしづ」にあるように、かんろだいの真上の天井は一間(約1.8m)四方がくりぬかれていて、日の光も雨も雪もそそがれる。

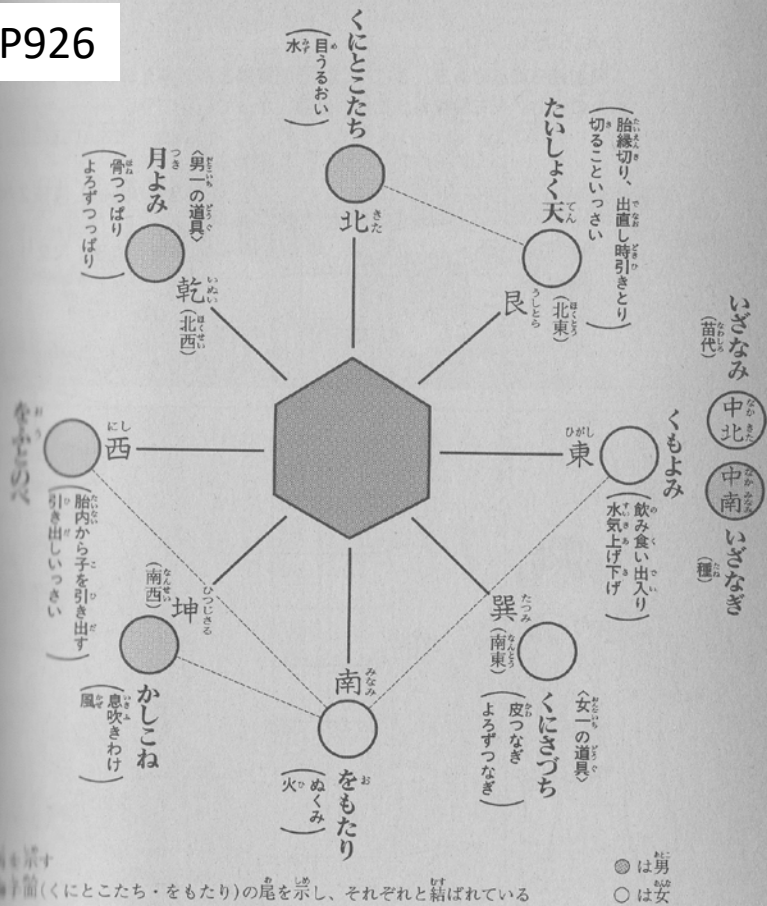
かんろだい
人間創造の地点である「ちば」に、その証拠として示されている。六角の台で、十三段重ね。礼拝の目標となっている。

P925



かぐらづとめは男5人女5人の10人が「ちば・かんろだい」をかこんでお面(かぐら面)をつけて踊る、天理教最高の儀式である。心は一つ「かんろだい」によせ、それぞれの役割をうけもって、その役割に応じた手をふる。親神が人間を創造した時の様子を、いまにあらわしてつとめられるが、各自の徳分・役割を十分に生かし、おたがいに立てあい、たすけあい、補いあう、それによってはじめて、一人ひとりがいきいきできる「かんろだい世界」へみちびかれる、と教えられる。

P926



かぐらづとめの説明は、簡潔で大変分かりやすい。

実際に人間がその役割に入った絵が『劇画教祖物語』とは別の『劇画中山みき物語』に出ていたので参考に掲示しておきます。

